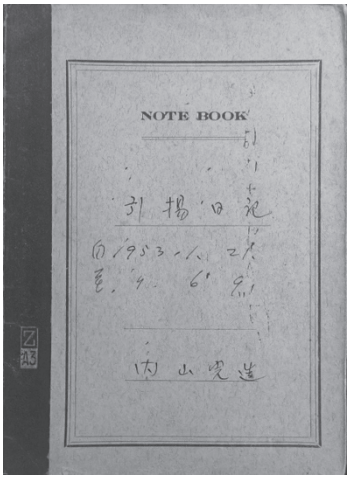
内山完造研究会報告④

「1953 年引揚交渉雑記」について

内　山　　籬



内山完造が大小のノートに記していた自筆の文書「雑記」について，現在私たちが目にすることができるものは全部で 54 冊ある。その 54 冊を表紙に書かれた日付順にならべ，仮に＃1―＃54 の番号を振ってみた。そのうち上海在留時期の 4 冊（＃1―4，1944. 6. 5–1946. 10. 5）については『人文学研究所報』No. 64 および No. 65 に，内山完造研究会メンバーによる解読とコメントが掲載された。

ただこれらは“大小のノートに記していた”雑記，日記などのみで，書簡や原稿用紙に書かれたもの（発表，未発表）は別個に整理することとしている（上記所報 No. 64 拙文「内山完造の自筆文書について」参照）。

「雑記」＃5 以降はすべて帰国後に書かれたものであるが，そのうち＃5 の表紙には「摘録」（1952. 4. 7–5. 30）とあり，上記＃4 から約 5 年半を隔てて書かれている。この間，ノートに記した「雑記」はないが，原稿用紙に書かれたものは，上海から帰国以前に東京内山書店へ送られてきた「上海で書いた原稿」（茶封筒の表書き）を含めて少なからず現存（部分的には既公表）しており，「雑記」と併せて読むことにより完造の（特に戦後の）思考，主張を理解する一助になると思われる。

さて，表題の「1953 年引揚交渉雑記」について，完造のノートには「引揚日記　自 1953. 1. 21 至 6. 9」とのみ書かれている。これでは完造自身の引揚げ――帰国との誤解を招きやすい，記述が 6 月 9 日以降も続いていることから，内山完造研究会では本号掲載にあたり表題のように改めた。（本文注記参照）

1953 年引揚交渉というのは，前年 12 月 1 日に中国の国営通信社である新華社が放送で，中国に約 3 万人の一般日本人と少数の日本人戦犯が存在していること，そのうち一般日本人で帰国を希望するものについては，それを支援すること，そのために中国政府は中国紅十字会を窓口として日本側と交渉する用意があることを発表してから，その具体化をめぐって行われた日中間の交渉のことである。

中国では国共内戦を経て 1949 年 10 月中華人民共和国が成立した。日本政府は 1951 年のサンフランシスコ平和条約で主権を取り戻した後も，米国に追随して中華人民共和国政府を承認せず，「中共地域」と呼び，蔣介石政権が統治する台湾の「中華民国」を承認し交渉相手としていた。したがって中国大陸の日本人引揚げ問題についても中華人民共和国政府との直接交渉は成立せず，中国政府の指定した民間三団体（日本赤十字社，日中友好協会，日本平和連絡委員会）および高良とみ参議院議員による代表団派遣となった。

高良とみの記述によると，三団体の幹部および高良議員が日赤に集まり，代表団メンバーを「内山氏

の発言にて各二名を推薦することとし」中国紅十字会宛に打電した。（高良とみ「和平日記」（『高良とみの生と著作 6』（ドメス出版 2002）所収）

代表団は，三団体各二名に高良とみを加えた正規代表 7 名，秘書，随員さらに政府派遣の工作員ら 6 名を加えて総勢 13 名で，内山完造は日中友好協会の代表として正規代表 7 名の一員となった。

この間，日本政府が代表団の交渉権限に制約を加えるほか，代表以外の秘書，随員などの費用の国庫負担を拒否し，高良とみ参議院議員の旅券発給を 1 月 26 日の出発当日まで引き延ばすなど，民間団体による交渉を阻害するような動きをした。

「1953 年引揚交渉雑記」の主な内容を見てみよう。（太字は雑記本文の小見出し）

日本人としての心の寂しさ

完造は代表に選ばれた際，「内山完造当年とって六十八才，この度の仕事に失敗せんか生きて再び日本の土を踏まない」という決意を表す。なみなみならぬ意気込みである。

また，秘書，随員について外務省と交渉するなか，代表それぞれが他を思いやる心を持っていないと感じて，「此時私をこめて全員は三万人の引揚者と其帰りを待つ家族のことを忘れているのである」と自戒する。

帰国推進国民大会

1 月 17 日に大阪で 7 名の代表団員と中国在留邦人の帰国を待つ留守家族会との会合があり，平野義太郎代表による経過報告と各地の留守家族会からの要望の聞き取りを行った。

留守家族の心理

代表団への要望

中国在留邦人を帰国させるという中国政府の発表を聞いた留守家族の大多数が，一日も早い帰国の実現を望むことに理解を示しつつも，在華邦人のなかには中国で働くことを選ぶ人が何人かはいるはずであり，「それが私は留守家族の人々の頭と在華邦人の幾分かの人々との頭の喰い違いであらうと思うのである。」「現在の日本人は東洋的にならねばならんことを自覚して欲しいのが私の心である。」と記す。

代表団への要望が数多く出たが，「何れの要望も中国という相手のあることを考へないか，考へても相不変日本が優越的位置にでもあるかの様な態度の人が多い」ことに，日本が時代に逆行しつつあると感じている。

代表団の顔ぶれが決まり，出発前のいくつかの活動に参加するなかで，完造は代表団と政府，代表団内部の意見の違い，多くの留守家族の考え方に対する疑問などを以上のように記している。

代表団（公式名称：在華同胞帰国打合代表団）一行 13 名は 1953 年 1 月 26 日夜，羽田空港を発って香港経由で北京へ向かう。完造はこの 13 名のリストを記している（若干の注を附す）。

高良とみ（代表，参議院議員），島津忠承（代表団長，日本赤十字社社長），工藤忠夫（代表，同社外事部長），平野義太郎（代表，日本平和連絡委員会），畑中政春（代表，日本平和連絡委員会），加島敏雄（代表，日中友好協会），内山完造（代表，日中友好協会理事長），以上正式代表。中村昌行（政府工作員，大阪商船次長，高砂丸船主），林祐一（政府工作員，外務省条約三課課員，後の初代駐中国臨時大使），氷見由太郎（随員，日本赤十字社），岩村三千夫（随員，日中友好協会），桜井善一（高良とみ秘書），平垣美代司（随員，日本平和連絡委員会，日教組書記長）

北京到着後の代表団は，（完造旧知の）廖承志を団長とする中国紅十字会代表団と 4 回の正式会談を含む会合を重ね，3 月 5 日に最終合意に到り，共同コミュニケに署名する。ただここに到るまでに日本

政府との電報のやりとり，それをふまえた紅十字会との会談，また代表団内部での意見の相違などかなりの議論があったが，最終的に紅十字会の提案を受け入れるという経緯があった。

思い出して

完造は「第一回船には一人ずつ代表が乗って帰るべきである」と主張したが，誰も賛成しなかった。二，三の団員がこの署名を急ぎ，すぐに帰国したいと主張したことを，参議院議員選挙に出馬するためであったと知り，「其浅薄さに眼を円くしたのである」（5 月 22 日）

この雑記には中国紅十字会との会談のほか北京滞在中のさまざまな活動，知り得た新中国の国家建設の模様，それらについての感想と意見などが記されている。

中国革命と墨子

中国の国家建設には墨子の兼愛と交利の思想が役立てられているとみる。「今日の服務ということは墨子勤労主義の主張が勤労を人間の義務としたことと全く一致して居るのである。」

批評

新中国をめぐる批評に二通りあるが，その可否を判断する基準を自己利害からどれだけ離れているかに置くべきであると説く。また体験として否定的な見方を語ることにも，「一人の体験で全体を決めることは出来ない」とし，今回の「中国帰国者の大多数は中国の善いことをいうに決まって居る」という。

1952 年の収支，1953 年の収支，中国の貿易，中国第一次五ヶ年計画 1953（予定）

中国国家経済建設の動向を統計数字で読み取る。おそらく『人民手冊』（日本で年鑑にあたる）1952 年版，1953 年版から抄録したものと思われる。

翻身

三反と五反

北京滞在中の活動として農村や工場の見学が組まれ，それらの折に紹介された中国革命の実態を表す言葉。「翻身」は主に農民が解放され，生まれ変わったことをいう。「三反と五反」は当時行われていた官僚および民間人の各種不正を摘発する三反五反運動の説明。

雑記にはこのほか北京滞在中面会を希望する相手のリストが記され，古い友人である郭沫若や欧陽予倩には晩餐会に招待され旧交を温めたと書いている。また翻訳懇話会（日中友好協会）により日中両国作家の作品をお互いに翻訳出版する希望，日本出発にあたり個人的に頼まれた事のメモなどを記している。

完造にとって戦後初の訪中となった「在華同胞帰国打合代表団」は 1 月 26 日夜羽田を出発し，3 月 10 日羽田帰着という長期の出張となった。完造はこの訪中について，この「1953 年引揚交渉雑記」のほか『花甲録』（岩波書店 1960）の戦後追加部分「一九四六年より一九五九年まで」のなかに「北京にて（二月二十日）帰国代表訪中記」など 4 篇，『平均有銭』（同文館 1955）に 2 篇を，それぞれ記している。

そのなかで『花甲録』にある「最終会談」は 3 月 5 日の共同コミュニケに到る会議で何が問題であるかを整理された形で書いている（同年 12 月 25 日付け）。それによると，（1）三団体の代表者の帰国船への乗船，（2）帰国する日本人の範囲 ── 16 歳以上を本人の自由意志とするか，20 歳以上とするか ──，の二点で，いずれも日本政府の意向と中国紅十字会の認識，意見の相違が最後まで解決せず，代表団内部でも意見が対立し，結果として紅十字会の提案どおり共同コミュニケが作られた。完造は「このコムミュニケを丸呑みにすれば三万日本人は帰国出来る。もし丸呑み出来なければ三万日本人は帰国出来ない。」（『花甲録』）と書く。

このコミュニケには紅十字会からの要望として，日本在住の華僑，留学生で中国へ帰国を希望する者を，帰国する在華日本人を中国の港まで迎える船に乗せるという項目も盛り込まれた。

代表団13名は3月6日北京を発ち，広州，香港を経て3月10日夜羽田に帰着したが，ただちに外務省に呼び出され「……およそ一ヵ月後にでもゆっくり尋問して何等差し支えのないことをくだくだと尋問されるので私は少々がっかりした。」（同）

内山完造戦後初の訪中は，この在華同胞帰国打合代表としての任務とともに終了した。

共同コミュニケによる在華邦人の引揚げは2週間後に開始され，以後興安丸，高砂丸などの日本船を使い，7回にわたり合計2万6千余名の帰国が実現した。